

寄り添う

外国由来の子どもたちと共に

日本生まれ日本育ち、母語が育っていないかったU君のお話の続きです。言葉が不十分であるがゆえに時間や場所の概念があいまいなまま育ったU君は、会話や作文の中で「あれ？何かおかしい」といった間違いをすることがたびたびありました。

「週末、どこへ行きましただか」といった質問に対し、U君が書いた答えは「どこへ行きませんでした」(正答・どこも行きませんでした)。助詞だけでなく、過去と現在の時制が混乱していました。また、住所につ

いて話した時のこと。「〇〇さんは長野市に住んでいます。ではU君はどこに住んでいますか？」と聞くと

U君から教えられたこと(下)

「ぼくは“家”に住んでいます」。

文法的な間違いはないのに、質問の意図がわかっていない、つまり、U君の頭の中で場所の概念が整理されていないことがわかりました。

そんなU君でしたが、絵本の読み聞かせは大好きでした。私の膝の上

にちよこんと座り、絵だけでなく読み手の声の調子や表情にも意識を向けながら聞いている姿がそこにはありました。感想もたくさん話しました。彼にとつて、安心した環境で自然に言葉をインプットし、整理する時間だったのかもしれない。そう

やってU君は“母語としての日本語”を少しずつ獲得していきまし

た。驚きの連続だったU君の日本語支援は約2年間続き、その後は彼にとって適切な学びの場が校内で保障され、学習に取り組んだそうです。私

たちの手を離れて1年半、授業参観の機会がありました。グループの中心となり、仲間に優しく声をかけながら活動する彼の姿に目頭が熱くなりました。

人間は、言葉を使って物事を考え行動する生き物です。私はU君を通して、人間の思考を支

える言葉の大切さを改めて知りました。大人はつい「勉強がで

きないのは努力が足りないからだ」と、子どものせいにしてがちですが、U君のように言葉が育っていない子どもがいるという現実も知ってください。

(松本市子ども日本語教育センター コーディネーター・栗林恭子)